

「否定知」「メタ知」考

池田光義

1. 否定知とは

ある顔写真を示され、これは誰かと問われる。「見たことあるような気もするけど……」と言葉を濁す。すると、いつかどこかで耳朶に触れたような名前が次々と挙げられる。それに答えて、「いや、そんなんじゃないな」「それでもないな」……。「これはXである」という肯定知様態では答えられなくても、「Aではない」「Bでもない」……と「〜ではない」の否定知様態でならば（必要と知識量に応じて次々と延長できる）連言形式で答え続けていける場合が少なくない。

そんな消極的で間接的で中途半端で迂遠な方式による知など知

の名に値しないと嘲笑う者もいるだろう。が、その者は、限られた認識能力と情報・知識でもって刻々の個別的で具体的な複雑状況に対処しなければならぬという私たちの生存の制約を忘却しており、それだけでは私たちの生存条件を満たすことはできない。否定知が(a)ときに肯定知の代役を担い、(b)ときに肯定知を（相互的に）補完・補強し、(c)ときに肯定知の為し得ぬ機能を果たすということがなければ、私たちの認識活動、生活過程は成立しないであろう。さらに、この否定知様式でも全く解答できない場合、肯定も否定もできない場合、一応は否定できるが不確かな場合、否定の連言の長さが様々である場合など多様な解答タイプを顧慮するならば、否定知には、やはり様々な質と量を備えた、しかしそれ

自体は潜在態・可能態を帯びた不可視な「根源知」のようなものが根底で働いていると推測できよう。この根源知が、その時々異なる特定の状況や課題に応じて、肯定知の形式や否定知の形式で実現し発現する（もしくはそもそも機能しない）と考えるのが自然であろう。

顕在的な肯定知様式では知らなくても否定知の地平で見れば無数の事柄を知っているということの好例として、言語能力を挙げることができる。ある言葉の意味を尋ねられてもうまく答えられない。その言葉を使った文例を求められても適例が思い浮かばない。「では、A、B、…なんて言い方あるの」と問われると、「いや、そうは言わない」と即答できる。しかし、これはネイティブの場合に言えることであって、相当の語学力を持つがネイティブ並みとまではいかない非ネイティブの語学熟達者は、かなりの程度（ときには「並み」のネイティブ以上に）適例文を作れても、ネイティブなら難なく「そうは言わない」「なんかへん」と断定できる間違いでも、自信を持って答えられない場合が少なくない。これは、外国語熟達者とネイティブとの語学力の差は、肯定知においてよりもむしろ否定知において、より顕著に現れることを意味している。逆に言えば、否定知の方が肯定知よりも、より堅実で豊かな根源知を必要とすることを示唆している。

このことは、専門家集団と非専門家集団との間の知の非対称性についても当てはまる。専門家が自分の分野について肯定知で明

示的に陳述できることは意外と限られているが、否定知の形であれば驚異的と言えるほど多くのことを知っている。専門家は肯定知よりもむしろ否定知に具現されやすいということである。これは、専門・関連領域の事象についての否定知に習熟していない者は専門家の名に値しないということの意味する。いずれにせよ、知の深みや充溢は、肯定知よりも否定知に体现されやすい。その帰結は何かというと、知は肯定知よりも否定知に関して個人間、集団間の較差が大きいということである。「知の非対称性・肯定知△否定知」という図式が成立するのである。

否定知の特質についても一つ確認してみよう。それはこの知の実現様式が非常に個別的で具体的であり、状況・文脈、課題・問題に依存的事であることだ。直接的には（個別的で具体的な状況・脈絡における個別的で具体的な問いに対する否定的解答）として否定知は成立するのである。換言すれば、それは特定の具体的な生活・思考、行為や振る舞い、表情や身体動作、言明や発話の過程でしか顕現しない。つまり、否定知はその大半が潜在態・可能態で存在し、顕在化・実現化されるのはそのごく一握りに過ぎないのである。これは、潜在態の否定知は無限定ではないが無尽蔵であり、その全容をあらかじめ明示化することは不可能であるということも意味する。

個別知であり状況知であるという否定知の特徴は、有意味で有用な否定知と無意味で不要な否定知とを峻別する視点からも重要

である。というのも、ある対象についての否定知は形式的には肯定知より遙かに大量に存在しうるが、「猫は空を滑空しない」といった空虚で無用な知がその大半を占めるからである。否定知は、まさにその個別状況・具体的課題への顕著な依存性によって、その時々々の状況や課題と関連し、状況判断や課題解決に有効な知に限定されるのである。なお、問いの内容自体が「欧州人の多くは青色を好む」といった肯定的・積極的事態にかかわるのか、あるいは「牛には赤色は見えない」といった否定的・消極的事態にかかわるのかは二次的事項である。問題となる事態が成立しないことを告げる知であるかどうかは肝要なのである。

本稿が否定知と呼ぶような知の様式が私たちの生活過程において重要な働きをしていることには同意できたとしても、それを「知」と呼ぶことには抵抗があるかもしれない。暗闇に蠢く物影を一瞥して、「何だか分からんが、うちの猫ではないな」と呟くとき、それは私が始めから知っていた知識ではなく、その場で初めて行った判断の結果である。そもそも「知っている」とはひとつの認識行為ではなく知的状態に過ぎない、と。しかし、まず指摘したいのは、旧来の判断論が判断というもの、あまりにも顕在的意識的な、かつそれなりの時間を要する思考過程に限定し過ぎてきたということ、熟考と検討を重ね、白黒判定の揺れや選択・決断への逡巡を伴うような判断様式しかそのプロトタイプに据えてこなかったことである。だが、判断行為がこの種の形式に限られ

ていたとしたら、私たちの生は危ういものになるであろう。むしろ、無意識的（あるいは半ば無意識的）で（半）自動的・（半）機械的な瞬時判断が私たちの判断作用の定常的な基本形でありその大半を占めていると考えるべきだ。意識的判断とは、この基本的判断が客観的状況や主体的課題の変化などによって機能不全を陥ったときに作動する非定常的で特別な判断様式なのである（下條「一九九六、一九九九」等参照）。もし、判断作用を意識的形式から（半）無意識的で（半）自動的な瞬時形式へと漸次的に移行させていく一方、「知っている」という状態も知の様々な側面、様態の一つに過ぎず、「判断する」とは一定の状況・条件における知の特定の機能様式の一つに過ぎないと見なせるならば、否定知と否定的判断の境界は流動化していくだろう。

ライル「一九八九」が「命題知識 (knowing-that)」に加えて「手続き知識 (knowing-how)」も独自の知の類型と認定したことは現代知識論の画期とされている。しかし、そこでも、命題知の性格や構造については旧来の知識概念がほとんどそのまま踏襲されており、命題主義的枠組みに囚われたままであると言つてよい。また、この二つの類型以外の多様な知の在り方も等閑に付されたままである。このいわば知の二元論を打ち砕くには、両者の差異の相対化を図ればよい。すなわち①多くの知の様態が両者には分類できないことを、「いずれでもない」という否定形式で示す。②事実上、運動能力や身体技能に限定されている手続き知識の概念

を、測定・計算ができる知識（＝測定・計算の仕方についての知識）、言語操作ができる知識（＝言語操作の仕方についての知識）、さらに認知や思考ができる知識（認知・思考の仕方についての知識（knowing-how-to-know）に拡大・延長していく。一方、③命題的な知識内容を知ることが出来る知識（knowing-how-to-know-that）とはどんな知識かを考えてみる。

以上のような検討を試みるならば、知とは一方では過去の判断の集積であり、他方では潜在的判断力という側面を有することが明らかになるだろう。少なくとも、一般に言われるところの判断なるものは動態、機能態、過程態にある知であり、知なるものは静態、対象態、結果態にある判断であるというように、両者は相互に変様し得るし、「同じ」認識過程・結果を異なる視点から見た二つの様態に過ぎないことが分かるだろう。

2. 自動的否定知

前節で述べた否定知の種類——命名はあえて控えよう——が否定知のすべてではない。別の種類の否定知、すなわち〈消極的な自動的否定知〉について考えてみよう。その具体例としては、胸部のレントゲン写真を見て肺腫の有無を診断する医療行為、ベルトコンベアーを流れてくる一連の生産品の中から欠陥品をチェックする作業、行きかう通行人の中から容疑者を特定する捜索行為

などを挙げる事ができるが、ここでは、鉱石の溶解槽へ溶解液を注入する作業現場を検討してみる。

「のぞき穴からはげしく吹き上げてくる蒸気を透かして見える泡の面がぐんぐん上昇してくるのを見ると、経験のない人間は本能的にバルブの方に手がのびてしまう。その時なれた作業者は平然として眺めている。……。この『判断』の差がなれた人間のスムーズな作業と初心者のぎこちなさを分かっている決定的な差である。この『判断』の差はそのまま両者のもちあわせている判断の基準——経験の量——の差である」「これらの判断にはほとんど思考めいた過程が介在してこないということは注意しておく必要がある。それは徴候↓結果（すなわちとるべき行動）というふう整理されたパターンの群のようなものであって、徴候をみとめると自動的に手が動いてしまう、あるいは足が動いてしまうという風に選択は行われてしまうのである」（長岡「一九七二」、九七／九八頁）。この記述は、自動的否定知の作動場面を描写して精妙である。

この否定知は二つの様態・過程から成る。(a)一つは、事態が定常的に進展する限り働き続ける（半ば）無意識的な潜在態の否定知で、通常、時間的には大半を占める。外見上は何ら認知的反応が見られないが、まさにその無反応それ自身が「何も特異事象は生じていない」という自動的な判断効果をもたらしている。(b)もう一つは、わずかな徴候に的確、迅速に反応し、事態が定常的ではな

いという判断とその後の認知的・実践的対応を始動し牽引する知の様態である。意識を伴う場合もあるが、多くはそれ自体ほぼ(半)自動的、(半)機械的に行われる反応行為として実現する顕在態の部分である。一見、単なる無反応あるいは無機能に見える過程と特異事象への瞬時反応およびそれへの行為上の対応という過程とをバラバラではなく統一的、全体的に捉えることが、この種の否定知理解の要諦となる。

一連の関心事象が対象域にありながら、あえて反応しない知の様態(a)についても少し説明を加えておこう。それは一見、単なるアイドルタイムのように見えるが、「……その時間こそが労働の主要部分が進行している時間であり、ここでは最も知的な緊張にみちた作業が行われていたのである」「同右、九〇頁」。何か非定常的な事象が生じたときに的確に反応する能力の方ばかり注意が向けられがちだが、そうした非定常時に的確に作動することができるともかわらず、あえて非定常時以外は作動せずに「沈黙」し「無表情」を維持し続けることが、この否定知様態の重要機能なのである。消極的に見える無反応も決して機能休止・停止を意味するわけではなく、認知的順機能を果たしているのである。

この否定知様態は、直接的には、(特定の事態を言明する)命題の内容を否定するという形式をとってはいない。当座の実践的、認知的な問題脈絡にとって進行事態が持つ意味や重要度(例えば有益あるいは有害・危険あるいは異常・特異)に関して、ある種

の価値判断ないしは状況判断を下しているのだ……まさに「重要ではない」「問題はない」という否定的・消極的形式で。それは、無反応という反応であり、まさに反応しないということを通じて「重要ではない」「問題はない」という状況判断を示す知の様態である。これとの連関で強調されなければならないのは、この事態は「重要ではない」という状況判断が同時に「無視してよい」という実践的、認知的行為への指針や指示も意味しているということである。この種の否定知はその消極的な無反応・沈黙作用によって、事態の意味解釈・価値判断と事態への行動指針・指示(対応しないという対応)という二重の否定機能を果たしているのである。それは、解釈知と実践知の渾然一体である。

この種の否定知の最大の効用は、思考経済効果にある。もちろんそれには、ある程度の不確かさが付きまとう。しかし、「絶対ではないが満足できる」程度には確実であり、個別的事態の詳細な逐一的検討によって下される「特に問題はない」という意識的判断、あるいはそれに基づく対応と結果的にはほぼ同様の効果をもたらすことができる。そしてこの無意識的で(半)自動的、(半)機械的な知の様態は何よりも迅速性と労力節約の点で際立っている。個別的些末事象にいちいち反応することは、認知コストの浪費につながり、喫緊事態に直面した場合の瞬時的確な対応を不可能にするであろう。一見、怠鈍な「知的無為」にしか見えないが、その実、意識や注意集中を伴う思考・判断であれば要するで

あろう膨大な労力と時間を省減しているのである。

複雑系経済学を提唱している塩沢「一九九七、一九九八」は、経済過程は判断や計算に基づく行為ではなく無意識的な定型・習慣的行為によって再生産され、この定型的行為こそが、限られた情報・計算力でもって複雑な経済事象に対処しなければならぬ人間の適応結果の一つだと指摘しているが、この指摘は本稿の問題脈絡にとっても非常に興味を惹くものがある。というのも、そうした定型的・習慣的行為を支えているのがまさに本稿で言うところの否定知の働きであると考えられるからである。定常過程における行為の定型化・習慣化を実現するうえで重要な認知条件は、些事にいちいち反応しないこと。それでいて「何事か」が起されば直ちに反応すること。反応しないことが、事態の定常性に關して逐一判断に劣らぬ機能を果たすことである。仮に否定知機能が存在しなければ、複雑事象を現前にしてその些末でかつ錯綜する事象をその都度分析し、様々な事態を想定して逐一検討・判断する必要に迫られることになるだろう。「複雑性への対応」「複雑性の縮減」という観点でも、否定知は重要な要因をなしているのである。

3. 個別的普遍化、具象的抽象化

否定知様態は、経済過程に限らず、私たちの生活過程全般に渡

って不可欠の役割を演じている。例えば、現代アートはその奇抜さや意外性や異化効果の少なからぬ部分をこの否定知作用に負っていると言える。シュルレアリスムの〈超現実〉概念についての解説から引用する。「超現実」のイメージは、「二つの伝導体間の電位差」が発する閃光に彩られている。それは、二つの現実が異質であるために、いやもつと正確に言えば、人為的な操作を受けずに異質のままに衝突したがために、光り輝いたのだ。そして、その光輝の強さは、二つの現実の『電位差』が大きければ大きいほど増す。二つの現実が異なっていればいるほど、両者は激しくスパークすることになる」(酒井「二〇一一」、九一頁)。空飛ぶ金魚、壁から顔を出す馬……、〈超現実〉といえどもその構成単位となる対象や事態は、日常慣れ親しんだ〈現実〉世界の対象や事態と変わらない。それでも〈超現実〉が〈現実〉以上の〈超現実〉を構成し、奇異で異様な印象を与えるシュール効果が生じるのは、そこにおいて、それ自体は〈通常〓現実〉の対象や事態に過ぎない要素が〈通常〓現実〉では実現しない性質、関係、行動、効果を示しているからである。魚や馬がどのような条件でいかなる性質、関係、行動、効果を示し得るのか、私たちは潜在様態であるとはいえ肯定知の形式でもかなりの程度知っている。しかし、「金魚は空を飛ばない」「馬が壁から首を突き出すことはあり得ない」という否定知は潜在態でそれ以上に無数に知っている。この否定知は、〈現実〉世界に接している限りは沈黙しているが、〈超現実〉

の不可能事象に遭遇すると途端に声なき声を発する。まず「この絵はなんか変だ」「どこがおかしい」と感覚的・感情的な判断形式で意識に現れ、次に奇怪さの〈知的〉分析・解釈（「魚が空を飛ぶはずがない」等々）の形式で実現する。この否定知が作動しなれば、シユールな絵画も何の変哲のない、自然だが陳腐この上ない俗画にしか見えないであろう。「二つの現実の電位差」を最大化させて鑑賞者の内面に否定知を強烈に作動させるためには、創作者の側はいったん自己の主観内で否定知作用を意図的に極力、遮断しなければならぬ。それでも残響する否定知効果を完全抹殺しようとして、一部のシユルレアリストたちが機械的運動や偶然の戯れに訴えるに至ったのはごく自然の成り行きであると言える。機械はそもそも否定的には、ほとんど何も知らないからだ。

ロボット開発で語られるようになった「不気味の谷」現象にも、この否定知が関与していると推測できる。「本物の人間ではない」と明快に否定知が働く限り、明快であるがゆえに逆に問題なく意識の根底・背景に退いている。人間と見分けがつかない場合には、そもそも否定知は作動しない。両者の中間帯である「人間にそっくり」の場合、「人間ではない」という否定知が確たる形で作動せず、「人間だ」「人間かもしれない」という肯定知との同時作動なしは相互反転を繰り返してしまうのではなからうか。あるいは、「多くの点でそっくり」だから他の性質や動きでもそっくりであることを自動的に期待し予測するが、「違う、これは人間の性質では

ない等々」と不断に否定知が働くのかもしれない。そして、肯定知と否定知が繰り返されるこの認知上の葛藤、未決、宙吊り状態が心理的な不安定感、「不気味さ」として感じられるのではないか。¹ところで、幼子は「不気味の谷」を感じることができず、その感知には一定の経験や学習が必要だということだが、この否定知と直接的経験との関係について少し考えてみたい。

まず手始めに、この種の否定知は人工知能には欠落しているという点を再確認してみる。PCが画像の情報に矛盾があることを見つけるのは難しく、「この写真のどこがヘン？」といった六歳児でも即答できるような質問にはまだ答えられないという。その理由は「現代のPCのハードディスク容量は私たちの生涯の記憶量を凌ぐが、PCに保存された情報は統合されていないからだ。つまり要素の大部分が、他の要素とつながっていない」「ある写真がヘンかどうかを私たちが一瞬で見分けられるのは、ある出来事はある物事と起き、別の多くの物事とは一緒に起こることはない」という物事の起こり方に関する知識を私たちは持っているからだ。そのためには、膨大な量の知識が効果的に統合されていなければならぬ」（コッホ他「二〇一一」、五一頁、傍点池田）。私たちはある事物について、それが取り結ぶことのできる可能的な対他関係を潜在的に知っている。それは、私たちが特定の具体的な状況や環境の中で具体的な特定事物に特定の仕方やかかわり、その対象物を他の特定事物と特定の具体的な関係において経験するとい

うことを無数に重ねてきたからである。私たちの根源知にあつては特定の事物は特定の関係と、また特定の関係は特定の事物と別個にはなく相互に連関する状態で与えられている。その連関についての知はほぼ無尽蔵であり、私たち自身そのほんの僅かしか明示化することができないし意識的に知ることもできない。が、個別の具体的な否定知の様態ならば延々と実現、顕在化させていけるのだ。人間知能と人工知能とを分かつかつ徴表の一つは、少なくとも現在のところ、膨大な量の個別的・具体的な経験に根を下ろすこの否定知の有無にあると言える。

哲学的脈絡で考えてみよう。パークリが槍玉にあげたことでも知られる、ロック『人間知性論』からの一節。「……三角形の一般観念は、直角三角形でも直角三角形以外であつてもならないし、三等辺でも二等辺でも不等辺であつてもならず、それらのすべてであると同時に、どれでもないものでなければならぬからである。実際、これは、異質で相容れない観念である諸部分を寄せ集めた観念であり、不完全で存在できないものである」(ロック、一六七―一八頁)改訳)。一般観念Xは、abc…のすべてであると同時に、abc…のどれであつてもならない矛盾物であるというのだ。確かにそれは、知の機能や過程から分離された結果の状態、あるいは明示的な意識対象・内容の様態においては一つの背理かもしれない。しかし、普遍観念Xは、個別的で具体的な経験過程、記憶過程、再生過程においては、個別的具象観念abc…の個性や

特殊性から独立した第三者、その抽象的な共通規定として自存しているわけではない。

それは、多様で変化に富んだ個別的な具象観念群により、その普遍的関係として不断に再生産され実現されるものなのである。その意味では、普遍観念は相互に変化し関係し合う個別観念、動的な変様過程としての具象観念の一契機とも言える。個別観念と普遍観念は、この多様な個別的具象観念の相互関係・過程の中にある限りは相互に含意・示唆し合っているのであり、その外部で凍結保存される観念内容として氷結することで初めて論理的に排斥し合うことになるのである。そして、個別的経験による具象観念が豊富になり、それらが織りなす動的な相互関係・相互作用も多様になればなるほど、具象観念はより確実で有効な普遍観念を含意・指示し、普遍観念もより多様な具象観念を含意・指示するようになる。これが知Xのいわば発酵・熟成過程の内実をなすと言える。こうして普遍観念と個別観念との間には、一意的ではないが無限定でもない、しなやかではあるが無規則ではない結合関係、不連続ではあるが種の関数関係が潜在態で成立し、必要に応じて実現し顕在化するのである。そしてそれはまた、知としての普遍的抽象作用と個別的事例化・適用化作用の同時進行でもある。極言すれば、知は直接的経験と結びついた具象的抽象化あるいは個別的普遍化という機能態、作用態として成立しているのである。ここにこそ、過去に必ずしも同じような個別経験を繰り返

返していなくとも、一定の熟成した経験と記憶があれば、豊饒な否定知も成立する根拠があると思われる。

4. 消却的否定知

消去法それ自体は実に重宝で確実な推論法であるが、その成立条件は極めて厳しい。可能な選択肢が完全に与えられていて（尽きていて）かつ数的に限られていること、「真理項」が必ず選択肢の中にあること、選択肢どうしが完全に独立・完結していることなどだが、事象が絡み合い錯綜する複雑な開放系が対象となるとこれらの条件を満たすのは著しく困難であるし、仮に条件が満たされたとしてもそのことを確認する方法も基準も存在しない。フリューム問題や組み合わせ爆発問題はその一例に過ぎない。

それでも私たちは、ある種の否定知を作動させてこの複雑世界に消去法的に対処している。それがどのようなものか、ある将棋棋士の言説が示唆してくれる。「将棋には、ひとつの局面に八十通りぐらいの指し手の可能性がある。その八十手ある可能性の中から、まず、大部分は捨ててしまう。たとえば、八十個のうち十七七個か七八個は、これまでの経験からももう考える必要はないとわかる。そこで、『これがよさそうだ』と候補を二つ三つに絞るのである。すべての可能性を思い浮かべるのではなく、カメラでフォーカスを絞り込むのだ」……山ほどある情報から自分に必要

な情報を得るには、『選ぶ』より『いかに捨てるか』の方が重要なのである。（羽生「二〇〇四」、五三／一二九頁、傍点池田）。さらに彼は、何千手と読んだとしても①状況理解には少な過ぎるし、②どこまで検証すればよいのか基準はないし、③かえって迷うだけで決断できないことも多いとも言っている。終盤のような「選択肢が絞られる局面になると、計算能力を発揮してすごい強さを発揮する」（同、一六四頁、傍点池田）PCも、「攻守が複雑な中盤では弱い」、中盤には「指し手の選択肢は無数にある」（同、一六三、傍点池田）からだという指摘も非常に重要である。

この棋士の言明から読み取れることは、第一に、私たちの知的能力は、選択肢が限られている局面よりも、むしろ無数の選択肢が存在する複雑な状況においてこそその特性と真価を発揮するということ、第二に、それには豊饒な経験を通じて醸成される否定知が決定的役割を演じているということである。その役割とは、問題域の複雑性を一気に縮減し、子細な逐一検討の対象を少数の有力な可能性に限定することである。否定知はこの役割を、暗黙的にきわめて短時間に遂行し、注意やエネルギーや時間を節約できる。限られた処理能力でこの錯綜世界を対象にするには、検討対象・範囲をあらかじめ特定の可能性に絞り込み、エネルギーと時間を十分にキープしておく必要がある。さらに決定的なことは、絞り込まれた可能性の中に「最適解」とまでいかなくても少なくとも「満足解」が含まれていなければならないことである。否定

知はそうした前提を創出する。

もちろんそのためには、問題域に関する過去の豊饒な経験とその発酵作用が不可欠である。羽生棋士の例で言えば、千局を超えたとする過去の対局中に類似の局面、状況を何回か経験して、それが手筋を読むときに役に立っていると言う。さらにそれと多数の感想戦やそれを遥かに凌ぐ膨大な量の自他の対局検討・研究が加わる。この過去の局面の記憶内容は、別の類似の局面での状況判断、手筋選択という課題遂行に必要な機能態、活動態で想起される。それは（ほとんどが無意識的次元で）一定の特徴づけ、関連づけ、解釈・評価を受けながら記銘Ⅱ生産され、事あるごとに再編集、再結合、再解釈、再評価を加えられながら保持Ⅱ再生産され、具体的な問題脈絡で課題解決に順機能的な様態で想起Ⅱ再生産されるのである（構成主義的認識論と構成主義的記憶論の協働・統合の視点）。それを類似局面で想起すること自体が既に、満足解への重大な接近を意味しているのは、こうした経験記憶のそのものの「来歴」（下條、前出）に依るところが大きい。過去の経験記憶がこのような過程を経て具体的な問題解決に即した形で想起され活用されるということは、それが知として発酵・熟成し、知として機能・実現することでもあるのだ。

言い換えれば、知（あるいは記憶）は個別的な状況ごとにししか成立せず、具体的課題に取り組むことでしか実現しない。脈絡・状況独立的、機能中立的な成立の外観しか呈していないような知

であっても、脈絡独立性云々それ自体がひとつの個別的で特殊機能的な文脈で成立しているに過ぎない。最近の言語論においては言語の語用論的側面が注目を浴び、またコミュニケーションでは言語コミュニケーションにおける状況依存的な推理機能の重要性が指摘されるが、こうした動向は、本稿における知の成立様式の個別性や文脈依存性の強調と共振する。

さて、消却的否定知は、問題域を相互に独立したいくつかの「場合」や「可能性」に過不足のないように分割し、それらを個別的に次々と否定していくという思考形式を取るのではない。少数の可能性を除いた全ての可能性を、逐一の個別的否定作業を経ることなく、一挙に全称否定し、いわば一網打尽に消し去るという形をとる。それはもちろん、論理的な推論や証明・正当化に基づくものではない。依拠しているのは、過去の豊饒な経験とその発酵効果だけである。その意味で、一気呵成に成就される消去的否定知は論理的には「非合理」であるかもしれない。実際それには錯誤や蹉跌の危険性が常に付きまとう。それでもそれは、そののみが果たすことのできる認知効果を考えれば、決して「不合理」だとは言えないのである。合理性の限界を超える次元では、「合理」的な対応ではなく（それは確実に機能不全に陥る）、「非合理」であっても「不合理」ではない対処法こそが認知的に順機能するのである。

5. メタ知

ここで〈メタ知〉に話題を転じてみよう。²⁾ある対象Aについての知を〈対象知A〉とすると、知としての対象知Aについての知を〈メタ知A〉と呼ぶことにする。知というものを対象知とメタ知との複合体と見なすことは、「明示的な命題内容としての知」に象徴されるような知の一元的な単層構造のイメージを払拭し、その多元的で多層的な構造・性格を強調することにつながるであろう。対象知とメタ知は相対的に自立しながらも相互に関連し、反転・融合し合い、メタ知が対象知の背後にフェードアウトしたり対象知から独立分離することもある。

本稿で特に注目するメタ知Aの内容は、第一に、対象知Aの知としての意味、価値、役割、機能などに関するものである。これには、例えば対象知Aがどういう状況や問題脈絡においてどのような役割を果たせるのかといういわばその用途³⁾使用価値についての知がある。私たちは、「水は100度で蒸発する」ことを知っているだけでなく、この対象知が「室内の空気の乾燥を防止する場合に役立つ」とか「圧力が大きく変動すると適用できない」ということも、肯定知的であれ否定知的であれ、おおよそ知っている。対象知Aの応用力、適用力として意識されることが多いようだ。さらには、対象知Aの所有価値、それを〈持つ〉ことそれ自

体の価値が挙げられる。例えば、専門家集団としての必須条件の一つは、該当分野に関して一般人の追隨を許さない高度知識を所有し、そのことが専門家同士や公的機関によって社会的に認定されていることであるが、これは専門の対象知のメタ知が社会的に制度化されていることを前提とする。あるいは〈秘密〉と呼ばれる知は、ある個人・集団Xがある事柄Aを知っているだけではなく、この対象知Aが排他的にX内部でしか保持されていないXの独占知であり、この排他性と独占性にこそ対象知Aの知としての価値があるというメタ知AがX内部で共有されていなければ成立しない。

こうしたことは、私たちが単に知の内容を理解しているだけでなく、その内容が理解され、有効性や確実性について承認されている間主観的範囲についてもおおよそ知っていること、すなわち共有知としてのメタ知を前提にしている。例えば、医者や看護師は、一般の患者を相手に説明する場面で使用できる知とできない知についておおよそ知っている。メタ知は教育の場面ではさらに個別的で個人的になり、この点でのメタ知の質と量は教師の力量を決定的に左右する。このメタ知の一部は独自の対象知として意識的に明示化、体系化されている場合がある。

メタ知で重要な位置を占めるのが対象知の「品質評価」に関する知である。これにはまず(a)対象知Aの知としての信憑性、信頼性、信用性を巡るメタ知がある。対象知Aの生産者、編集者、発信者、

伝達者などが知の生産者等々として持ち合せる能力や適性、誠実さや責任感についての知が、その代表例である。この知は、知の社会的分業・協業の複雑化・巨大化、さらには知の断片化や功利化や情報化や商品化に伴いその意味を増幅させている。現代人は、社会的に生産され流通する対象知の内容理解やその妥当性の直接的検証・確認に関する欠損を、知の生産者や媒介者への信頼によって補填していかざるを得ないが、この信頼はメタ知に負うところが大きいからである。もつとも、私たちは、この種のメタ知を不可欠にしているまさに同じ要因、すなわち知の細分化、専門化、高度化、情報化などが逆にこのメタ知の成立可能性を突き崩していくという逆説から逃れられないとも言える。

もう一つのメタ知として(b)対象知の確実性、精密性、有効性、妥当性の範囲、程度、条件に関するメタ知がある。様々な対象について獲得できる対象知の確実性や有効性の範囲、程度、条件は決して一様ではない。かなり怪しげな知でも、より確かな知が他になければ、それに頼るしかない場合も少なくない。問題は、それがどの範囲でどの程度まで有効なのかについて、おおよそでも知っているかどうかである。これは、いわゆる知の(真理性)にもかわかるものである。『正しい』と見なされていた知識が、『間違った』知識に転落するとき、対象知の明示的内容が完全に破棄されるよりも、その内容の妥当性の限界が認識され、有効性の度合いに大幅な修正が加えられる場合の方が多い。知の『真偽』を決

定する究極要因は、その対象知よりもメタ知の有効性なのである。あるいは、それが過言であれば、知の品質は、対象知とメタ知との適切な相関性で保証されると言い換えてもよい。怪しげな知も、それを怪しいと知っていれば、普遍真理として絶対化された確実な知よりも、知として有効な場合もあり得るのである。対象Aについて、対象知次元での深化は見られなくても、対象知の有効範囲・程度に関して以前より確かな知を得ることができれば、対象Aについての知の品質は向上したと言えるのだ。

(知らない、ことについての知)としてのメタ知というものもある。「これは何だ」と問われて「知らん。全く知らん」と答えが返る。しかし、全く知らないわけではない。何について知らないのか、知らない対象が何であるかは、大体は知っている。だからこそ、「それについては」知らん」と言えるのだ。多くの場合、(漠然とはしていても)ある対象のどの点について、何に関して知らないのかは知っている。この、いわば参照枠組みはあっても内容が空白の対象知についての否定知的メタ知を必要に応じて明晰な形で持つことは、独断論的頹落を回避するだけではなく、新たな対象知獲得に向けての問題意識の尖鋭化に資するであろう。

メタ知の構造、特性、種類、さらに対象知との動的で重層的な関係についての詳細はこれ以上論じることではできないが、次の点は指摘しておきたい。知が少数因子から成る線形系事象や長期安定状態を示す事象を対象としている限り、メタ知の意味はさほど

大きくはないかもしれない。しかし、知が多数・無数因子の非線形事象とかかわるとき、そのメタ知の意味は決定的になる。錯綜事象についての対象知の有効性は、状況・文脈・条件の変化に応じて様々に変化し得る。ある文脈や環境では有効で確実な対象知の内容も、別の文脈や環境では無効で不確実になるかもしれないし、その逆の場合もあり得る。複雑系の知では、対象知とメタ知の両面で高品質が求められるのである。もともと、このように対象が錯綜系になればなるほどメタ知の機能は高まるのであるが、その成立も（対象知以上に）困難になり、そこに知のジレンマがあるとも言える。さらに、知の主体と知の対象との認識関係そのものを知の内容に組み込み、その不可欠な構成要素とするような知が主流になってきていることも、メタ知の働きが重要度を増す一因になっているが、この点もここでは立ち入らない。最後に、対象知の明示的な内容それ自体には懸隔はなくとも、メタ知の次元では雲泥が生じ得るという点についても触れておく必要があるだろう。実際、先に示唆したように、現代社会では、対象知レベルよりもメタ知レベルでの経済性、確実性、有効性が物を言う。換言すれば、知の非対称性は、対象知の非対称性しか念頭にない非対称性論が想定する以上に、今後、より大規模に拡大していくと考えられるのである。以上のメタ知論を踏まえたうえで、再び否定知について考えてみる。

6. 否定知に固有の積極的機能

否定神学曰く、我ら有限者は神が（〜である）ことは知ることができないが、神が（〜ではない）ことは知ることができる。神は「aではない」「bではない」…という否定連鎖を通じて神を知ることができる。私たちの用語を用いれば、神についての肯定知は能わぬが、否定知ならば掌中に帰すことができるということである。人間が抱くことのできるありとあらゆる観念を次々と否定し、この否定の反復・連鎖を通じて対象の超越性、絶対性を絶えず把握し実感し続ける…。肯定知様式では認識できない対象も、否定知という様式では把握できる。それは、否定知も知として十全に成立すること、いや絶対的超越者のような人間の認識能力を超越する対象では、むしろ否定知でしか対処できないことを示唆している。これを一般化すれば、否定知は単なる肯定知の付属物や派生物ではなく、肯定知には不可能な独自の認識対象・様式を有し得るということである。あるいはある種の否定知様式には、肯定知が果たせないような積極的效果・機能も存在するということである。

否定神学の示唆する否定知が何よりも批判的なメタ知の様相を呈していることに注意を向けたい。肯定知は、錯綜事象のある側面を他の無数の側面から切断分離して固定化し、対象の関係態、過程態、機能態を不断に否定することでしか成立しない。否定知

連鎖は、この肯定知に不可避の絶えざる実体化を不断に否定し撤回していく。否定知は、肯定知との連続的な否定関係において、まさに肯定者であるがゆえに事実上の実体主義者にならざるを得ない肯定知への否定的メタ知として不断に作用していると言えるのである。

今さらそんな超越的存在者についての知など……と冷笑の向きには、日常推論に関する「反例発見説」（市川「一九九七」、一五頁以下）を提示してみたい。この説の前提は「領域固有性」の考えであるが、その核心はこうだ。私たちは日常思考では「それぞれの領域ごとの知識を使って、前提を解釈したり、推論を補ったりする。そのために、領域が違おうと形式上まったく異なる推論をすることがよくある。そしてまた、ある一定の推論様式を訓練したとしても、なかなか他の領域でそれが使えるようにならないのである」（同、二二頁）。そして反例発見説とは、問題となる推論の妥当性判断では、自分の経験や知識から「この推論がおかしいということを示す『反例』を見つけてみる」（同、一六頁）というものである。反例発見説が興味深いのは、この説が(a)知には推論機能があること、あるいは知は状況や脈絡によっては推論のはたらきとして、推論機能の様式で想起⇒再生⇒再生産されるということを意識しているからである。さらに(b)具体的な事例についての成熟した知はある種の普遍化や推論などの認識機能を潜在的に含んでいることを前提にしている点である。

本稿の趣向は、「反例を見つける」とは否定知が働くことであり、「反例の見つけやすさ」とは否定知の働きやすさであると再解釈することにある。そして日常的推論ではその論理的な妥当性の検証は他ならぬ否定知が担っている」と再定義することである。日常思考では形式論理的に反証を試みるのではないという点は妥当としても、そもそも反証を試みるのは、ある推論が（少なくとも即座には明確に示せないにせよ）「どこがおかしい」「不自然だ」と否定的に直感するからであろう。この感覚は否定知が働いた結果と考えることができる。系統的に、あるいはアトランダムに反証を試み、反例に遭遇して初めて「この推論はおかしい」と判断するわけではないだろう。それに、もし反例に遭遇しなければどうなるのか。その推論は正しいということになるのか。どの範囲、どの程度まで反例探しがおこなわれれば肯定判断、判断放棄あるいは不能判断が下されるのか。反例がある場合には、それをできるだけ確実に感知する精度が必要である。それを支えるのが否定知の働きなのである。「反例はない」という知の働きが「正しい」に近似の効果を持つためには、それ相応の領域固有の経験や知が必要になることは言うまでもない。

しかし、ここで何よりも注意を喚起したいのは、このいわば反証主義的な否定知の働きは、直接的には否定的・破壊的だが、それでも肯定知が為し得ない類の積極的な効果を日常思考にもたらしている点である。さらに否定知の働きが、少なくとも結果的に、

日常知に含まれている推論的な行為や性格や構造のいわば擬似論理的妥当性に関するモニター機能、すなわちメタ機能を果たしてもいる点である。

7. 否定知の独断化・実体化

否定知の積極的意義を強調するのは、肯定知を否定知から切り離していわば実体化する傾向が、「規定するとは否定することなり」というスピノザ¹¹ヘーゲルの金言も空しく、一向に退潮する気配がみられないからである。世界の肯定知的把握と否定知的把握の統一的、総体的理解はまだまだ果たされず、否定知は依然、肯定知の影やネガとしての存在に貶められたままである。しかし、ここではむしろ、否定知の独断化・実体化批判を試みて暫定的な終結とする。

まず、あの忌まわしき「想定外」言説について考えてみる。この「想定」とは、前提P（前提理論・方法論P+過去の経験的データs）の「最大値の予測結果M」、すなわち「P↓M」という枠組みの内部で成立する推論結果である。「想定外」言説の自己錯誤と欺瞞は、いくつが存在する有力なPやsの中から自ら、意識的に選択・設定した特定的前提・枠組み知識Pに基づいて最大値予測Mを行ったにもかかわらず、それを遙かに超える規模の地震が現実に起きた事態を、発生以前における知識や認識能力の限界に

帰した点である。彼らは、われわれの知識と認識力を超える事態が生じたこと、自らの過信のためにその限界を自覚できなかったことに強意を置く。しかし、問題の本質は、地震研究の主流派が、自ら選択・設定した肯定知的な枠組みから帰結する結果P↓Mを根拠に、「Mを超えることはない（〜超M）」という否定知を独断し続けてきたことにある。

その背景には、一定の想定を立て、その想定の内側でのみ事態を予測してそれに対処するという「想定思考」が潜んでいるのだが、本稿の文脈で特に指摘しておきたいのは次の点である。第一に、P↓Mの予測及びその前提Pの信頼度、妥当範囲・程度などについて主流派内部で共有されていた（いる）メタ知に重大な欠損があることである。それは、その理論モデルP（周期仮説と微候仮説）を、重大な反証データや有力な批判・対抗理論の存在を無視して、適用範囲・条件が局限されているにもかかわらず普遍的に妥当する確実な原理と見なしている点である。第二に、仮にP↓M予測が成立したとしても、だからといって必ずしも、P↓Mが成立しないわけでもないように、P↓超Mが成立しないわけでもない。それは、P以外の前提が成立する場合については何かを主張できるわけでも、P以外の前提が成立しないと主張できるわけでもない。肯定知P↓Mは否定知「Mを超えることはない（〜超M）」を必然的に帰結するわけではないのである。つまり、肯定知P↓Mは否定知「超Mを含意しない」にもかかわらず、ま

さにそれが否定知 \searrow 超Mを含むと独断してきたところに主流派研究者の虚仮がある。肯定知 $P \downarrow M$ の絶対化が、成立根拠を欠いた否定知 \searrow 超Mを、あたかも十分な根拠を持つ確実な知であるかのように仕立てあげたのである。否定知 \searrow 超Mの実体化である。

とはいえ、この問題の根の深さは、普遍妥当な知を掌中にしたければ、その前提として普遍的否定知を実体化せざるを得ないという人間の知の構造そのものにある。ある社会学者は「因果の法則的認識」についてこう述べる。「……実験室を拠点とする実験科学においてさえ、この条件で、この関係以外には絶対に起こらない」と断言できるわけではない。それは、一種の「排除の原則」を貫徹する厳しい要請である。なぜなら、因果関係があると設定された事象の関係以外に、その結果的な事象を生み出すような事象（出来事）がこの世に絶対に存在しないなどは、この世のあらゆる出来事を知りつくさないかぎり言明できないからである」（新「二〇〇四」、一九三―四頁、太字は新）。

「一定の条件Pでは必然的に原因 $A \downarrow$ 結果Bとなる」が確保されたとしても、「条件P以外のある条件Xで必然的に $A \downarrow B$ となる」とは「ない」とは断定できない。つまり「条件P以外のある条件Xで必然的に $A \downarrow B$ となる」可能性は原理的には排除できない。あるいは「条件Pのもとでしか必然的に $A \downarrow B$ となることはない」とは必ずしも主張できない。それでも「一定の条件Pでは必然的に $A \downarrow B$ となる」が普遍的で必然的な妥当性を有するかのよう

一般的に見なされるのは、「条件P以外のある条件Xで必然的に $A \downarrow B$ となることはない」という普遍的否定知が暗黙的に共有されているからである。別言すると、因果律を巡る知は、この普遍的否定知を自明視する無自覚的なメタ知、あるいはメタ知の希薄さに支えられているのである。因果概念が普遍的で必然的な妥当性を有すると主張するためには、私たちはその前提としてこの普遍的否定知を必然的に要請せざるを得ない。それは否定知でしか保証できない絶対的前提であるが、この否定知それ自体は無根拠で非合理的な論理的要請でしかない。因果概念のような世界構築・解釈の最も基本的な思考図式やそれによって獲得された諸々の知は、この無根拠で非合理的な絶対的否定知の基盤の上に成立しているのである。

注目すべきは、「一定の条件Pでは必然的に $A \downarrow B$ となる」という肯定知への信憑性が強まれば強まるほど、その前提となる否定知は当然視され、暗黙知化し共有知化していくという点である。それはまた、肯定知と否定知の両面における実体化、絶対化の増幅でもある。厄介なことに、この実体化は専門科学の現場に限らず日常場面でも決して稀ではない。その悲痛な実例を、私たちはあの大惨禍で目撃することになった。「大地震になると津波はこんな遠くまで／こんな高さまで到達するんだよ」……。それ自体は決して妄言とは言えない肯定知だが、それが反復され徹底され共有知化されていけば、いけば、いけば、それ以上の距離／それ以上の高さ

には達しない」という独断的否定知が自然発酵し繁茂していき、私たちはその囚虜と化していったのである。

本稿は（〇〇知）概念の粗製濫造に走り過ぎたかもしれないオツカムの剃刀に削ぎ落される前に少し相対化しておこう。そうした概念は「それ」「トランプ」のジョーカーだ。つながらない数と数のあいだを埋めるのに使う。使ったあとは用がない。そこに捨ておかれるか、別の人間が使う」（大沢、九一頁）。

注

（1）「不気味の谷」問題には、ある対象が自己の帰属集団・種族に属しているかいないかを常に明確にしておかなければ気が済まず、その峻別が首尾よくいかない場合、不安や恐れや不気味さを感じてしまう、あるいはそうした対象を独自の中間物として実体化し自己（集団）から区別・排斥しようとする人間の一般的心性の問題が絡んでいるが、それにはここでは立ち入らない。

（2）ここで言うメタ知概念と、情報論で言うメタ知識の概念や教育・認知心理学で用いられるメタ認知・記憶の概念（三宮「二〇〇八」、清水「二〇〇九」等参照）との関係についての議論は割愛する。

参考文献

新 睦人「二〇〇四」、「社会学の方法」、有斐閣。
市川伸一「一九九七」、「考えることの科学 推論の認知心理学への招待」、中公新書。

大沢在昌「一九九七」、「ジョーカーの当惑」（日本推理作家協会編）『ミス터리傑作選②』、講談社文庫。

コッホ、C/トノニ、G「二〇一一」、「人工知能の意識を測る」『日経サイエンス』九月号。

酒井、健「二〇一一」、「シュルレアリスム 終わりなき革命」、中公新書。
三宮真智子（編）「二〇〇八」、「メタ認知——学習力を支える高次認知機能」、北大路書房。

塩沢由典「一九九七」、「複雑系の経済学 複雑さの帰結」、N T T出版。

——「一九九八」、「市場の秩序学 反均衡から複雑系へ」、ちくま学芸文庫。

清水寛之（編）「二〇〇九」、「メタ記憶」、北大路書房。

下條信輔「一九九六」、「サブリミナル・マインド」、中公新書。

——「一九九九」、「意識」とは何だろうか 脳の来歴、知覚の錯誤」、講談社現代新書。

長岡哲郎「一九七二」、「工場の哲学 組織と人間」、平凡社選書。

羽生善治「二〇〇四」、「決断力」、角川新書。

ライル・G「一九八九」、「心の概念」（坂本百代他訳）、みすず書房。

ロック、J「一九八〇」、「人間知性論」（大槻春彦訳）『世界の名著②』、中公論社。